

日蓮聖人の法華經引用について一考察

田 澤 元 泰

日蓮聖人の遺文中には数多くの引用文を見ることが出来るが、その中でとくに法華經についての引用に焦点を合わせ、日蓮聖人の法華經のとらえ方について考察する為の基礎的な資料の一つとして検討すべくその引用の傾向を調べてみた。

なおこのレポートは小生の昭和五十一年度修士論文の資料にもとづいてまとめられたものである。

法華經とは妙法蓮華經のことであり、日蓮聖人遺文は昭和定本一・二巻のみからの資料である。又佐前期をA、在島期をB、身延期をCとした。

一、法華經引用の方法

(1) 引用箇所を示し方

日蓮聖人が遺文中に法華經を引用する場合その引用箇所を示す方法については次の七通りに分けることが出来る。

(イ) 仏云ク・仏説いて云ク

仏説であるという事を示しつつ法華經を引用したもの。

(ロ) 經文云ク・經云ク

仏教經典の肝要であることを示しつつ法華經を引用したものの。

(ハ) 法華經云ク

法華經であることを示す。

(ニ) 法華經〇卷云ク・第〇卷云ク・第〇云ク

法華經の第〇卷であることを示す。

(ホ) 法華經第〇卷ノ△品云ク・法華經△品云ク

・第〇卷△品云ク・△品云ク

法華經のどこの章であるかを示す。

(ヘ) ……云クとはせずに文章の中で經文を引用したもの。

(例) 法華經に於ては、仏自ラ一句の文字を正直捨方便但説無上道と定メさせ給ぬ。

(ト) 又云ク

前に引用があつて続けて引用される時。なお違った章が続けて引用されても「又云ク」とする場合もある。

以上七通りに分けることが出来るが、その中で多く用いられるのが(イ)と(ニ)と(ト)で次に(ホ)となる。

二、引用文の示し方

次に引用された経文についてみると

(1)原文通り(誤字も含む)

(2)引用文の中途省略

○乃至として省略した事を示す。

◎○印で省略した事を示す。

◎何の記号もなく一連の経文として示す。

(3)引用の標示はあつても引用文の省略されたものの三つの場合がある。

二、法華引用の傾向

日蓮聖人の遺文中(昭和定本一・二巻)の中で法華経の経文を引用した回数について調べてみると次の様になる。

	総計		
	佐前A	佐渡B	身延C
「方便品」	一二八回	50	30
「法師品」	一二〇回	19	48
「譬喩品」	一〇三回	41	19
「勸持品」	七七回	12	34
「薬王品」	六五回	8	19

「寿量品」	六二回	13	24	25
「宝塔品」	五四回	15	19	20
「安樂行品」	五四回	9	14	31
「神力品」	四一回	10	13	18
「不輕品」	二三回	2	13	8
「勸発品」	二三回	7	3	13
「涌出品」	二一回	1	12	8
「提婆品」	二〇回	10	6	4
「化城喩品」	一三回	2	3	8
「分別功德品」	一三回	1	4	8
「陀羅尼品」	一一回	3	2	6
「法師功德品」	一〇回	6	2	2
「授記品」	七回	4	0	3
「囑累品」	七回	0	5	2
「隨喜功德品」	六回	0	4	2
「信解品」	五回	0	4	1
「普門品」	五回	2	1	2
「序品」	四回	3	0	1
「藥草喩品」	四回	1	0	3
「本事品」	三回	0	2	1
「五百弟子品」	一回	0	0	1
「人記品」	一回	0	0	1
「妙音菩薩品」	一回	0	0	1

以上のように日蓮聖人は法華經全般にわたって引用しているが、引用の回数、頻度にかんがりの差がみられる。ただしこの表は経文の引用回数のみを合計したものであり、当然長い章(品)はそれだけ引用回数が多くなるものと思われる。しかし回数に比例して引用箇所が多くなるとは必ずしも言えない。たとえば「譬喩品」の如き長文な章でも、わずかに三箇所引用で全体の三分の二にあたる八三回もの引用がみられる。その他にもかなり重複した引用がみられる。そこでとくに引用回数が多い箇所について調べてみる。

(イ)方便品

○「十如是(とくに相・性・体)」

A 4 B 4 C 11 計 19

○「世尊法久後要当説真實」

A 1 B 6 C 8 計 15

○「若以小乘法乃至於一人我則墮墜貧此事為不可」

A 6 B 1 C 3 計 10

○「正直捨方便但説無上道」

A 10 B 2 C 6 計 18

(ロ)譬喩品

○「今此三界皆是我有……唯我一人能為救護」

A 10 B 4 C 10 計 24

○「若人不信毀謗此經則斷一切世間仏種」

A 18 B 3 C 6 計 27

○「其人命終入阿鼻獄」

A 17 B 2 C 12 計 31

(ハ)法師品

○「已説今説当説……最為難信難解」

A 3 B 5 C 11 計 19

○「而此經如來現在猶多怨嫉況滅度後」

A 4 B 8 C 12 計 24

(ニ)宝塔品

○「此經難持……皆應供養」

A 5 B 3 C 7 計 15

(ホ)勸持品

○「有諸無智人惡口罵詈等及加刀杖者」

A 1 B 9 C 3 計 13

○「我不愛身命但惜無上道」

A 2 B 0 C 9 計 11

○「數見擯出」

A 1 B 9 C 5 計 15

(ヘ)安樂行品

○「一切世間多怨難信」

A 2 B 7 C 9 計 18

(ト)寿量品

○「然善男子我実成仏已來無量無辺百千万億那由他劫」

A 2 B 5 C 4 計 11

(チ)分別功德品

○「惡世末法時(能持是經者)」

A 0 B 4 C 6 計 10

(リ)神力品

○「以要言之如來一切……宣示顯説」

A 4 B 5 C 2 計 11

(又) 藥王品

○「十喻」

A 2 B 7 C 15 計 24

○「我滅度後後百歲中広宣流布於閻浮提無令斷絶」

A 4 B 7 C 9 計 20

(ハ) 勸発品……藥王品と比較

○「於如来滅後閻浮提内広宣流布使不断絶」

A 3 B 1 C 0 計 4

○「所願不虛……当如敬仏」

A 3 B 1 C 9 計 13

以上のように引用回数重複している箇所はある程度傾向を持っていると言える。しかし引用箇所についても、長文もあれば、わずか数字といったものもありそれ等を合計した上での回数であるからただちに経文の重要度とはいえない。一応の目安とみるにとどめたい。

ところでこれら引用文を見ると、法難、更には法華経色読の自覚に關した遺文によく引用される経文が約半数をしめている。日蓮聖人は法難を通じて法華経の色読という独特なとらえ方をしているがその自覚をうながした経文について法難という背景をふまえつつ検討してみる。

三、法難と引用

日蓮聖人にとって立教開宗以後、諸の難に値うという事は、法華経にすでに予言されている事として覚悟している。『主師親御書』（四七～八頁）に『法師品』の

「而此経者如来現在猶多怨嫉況滅度後」

文を引用して、釈尊自らが怨多しと、自ら難に値われたことを説かれ、更に滅後の弘通に対して覚悟の必要を説かれたとして述べている。また法師品のこの箇所と良く一語に引用される『安楽行品』の

「一切世間多怨難信」

の文では、在世に於いてすでに弘通することの難しさが説き示されている。日蓮聖人が法難に対する覚悟を決めた最大の原因は釈尊すらが難に値っているという事である。そして『宝塔品』に示されている

「誰能於此娑婆国土広説妙法華経。今正是時如来不久当入涅槃。仏欲以此妙法華経付囑有在」（第一の勸宣なり。……開目鈔）

「我滅度後誰能護持誦此経今於仏前自説誓言」（第二の恩詔也……開目鈔）

「於我滅後誰能護持誦此経今於仏前自説誓言」（第三ノ諫勅也……開目鈔）

三箇の勸宣に勇気づけられたことは『開目抄』などでみることが出来る。

そこで次に現実に体験する法難を法華経でどのように予言されているかという問題が生じる。『唱法華題目鈔』では『勸持品』に示された三類の強敵について述べ

上の三人の中に、第一の俗衆の毀よりも、第二の邪

智の比丘の毀は猶しのびがたし。又第二の比丘よりも、第三の大衣の阿練若の僧は甚し。

と經文の意にそつて述べている。ところで、この『唱法華題目鈔』は『立正安國論』上進の数ヶ月前に著されている。つまり幕府への諫暁が我が身にどの様な結果をもたらすかは覚悟の上であり、この『勸持品』の文は日蓮聖人にとって大きな意味をもっていたわけである。こうして数多くの苦難に値うことになるが、佐渡流罪中に著された『波木井三郎殿御返事』（七四六頁）では

或有阿蘭若住於空処等者 建長寺・寿福寺・極楽寺・建仁寺・東福等、日本国、禅律念仏等ノ寺々也。と、勸持品の文を当時の諸宗の寺々にあてている。日蓮聖人が幕府によって流罪を蒙ったのはその裏で当時の諸宗の寺々の働きかけもあつたからであろうし、日蓮聖人もそれを知っていたわけである。

四、色読自覚と引用

この様に法華經の文が現実のものとなるにつれてそれは法華經色読の自覚へと高められて行く。日蓮聖人は「法華經の文に善合せり」「身に読めり」などと法華經色読の自覚について述べている。

そこでこの様な自覚の中での法華經引用について見てみる。法難の覚悟から色読自覚へと高められてゆく以上『法

師品』の「況滅度後」の文が大変重要な典拠となる。また『勸持品』の「数教見擯出」を引用して、自分の法難の体験とくに流罪を中心として、色読の自覚を深めている。

『開目鈔』（曾真蹟五六六頁）に

日蓮法華經のゆへに度々ながされずば数々の二字い
かんがせん。此の二字は天台伝教モいまだよみ給はず。況や余人をや。末法の始のしるし、恐怖惡世中の
金言のあふゆへに、但日蓮一人これをよめり。

と述べているのはこの事である。又『教機時国鈔』に

不頭三類敵人非法華經行者顯之法華經行者也。

と述べているが、ここでは法難というものがまだ客觀的にとらえられている。ところが、東条法難後の『南条兵衛七郎殿御書』（真蹟三二七頁）には

『第四卷』云「而此經者如来現在猶多怨嫉況滅度

後」『第五卷』云「一切世間多怨難信等云云。日本国

に法華經よみ学する人これ多シ。人のめ（妻）をねらひ、ぬすみ等にて打はらるる人は多けれども、法華經の故にあやまたるる人は一人もなし。されば日本国の持經者はいまだ此經文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ。「我不愛身命但惜無上道」是也。

と、自分自身が法華經にそくしているとの自覚がみられる。それは『種々御振舞御書』（曾真蹟九七一頁）での「天台智者大師も經文を行じ給わず」という日蓮聖人一人

の体験とみたのである。引用の点から見た場合、その経文のとらえ方に東条法難前後に於いて多少の変化がみられるわけである。

ところで『上野殿御返事』（一六三五頁）には

勸持品に八十万億那由佗の菩薩の異口同音の二十行の偈は日蓮一人よめり。……及加刀杖の刀杖二字の中に、もし杖の字にあう人はあるべし。刀の字にあひたる人をきかず。不軽菩薩は杖木瓦石と見へたれば、杖の字にあひぬ。刀の難はきかず。

と、『勸持品』の「二十行の偈」と自分の値難とについて述べている。日蓮聖人が法華経の『勸持品』を引用している箇所は、実はこの「二十行の偈」のみである。この偈は、諸菩薩が諸難にも耐えて法華経の弘通を誓っているところである。諸の菩薩が予言し、覚悟を決めた事を、日蓮聖人自身が同じ体験をしたところにこの文の色読自覚の意味がある。『法師品』では釈尊によって、『勸持品』では菩薩によってそれぞれ予言された事が、自分の身を通して現実の姿になっていくのである。又「及加刀杖」の「刀」の難に値ったのは日蓮一人であるとの自覚が見られるが、これは東条・竜口等の法難に於いて体験せられたものであり、天台・伝教は勿論の事、法華経に説かれた不軽菩薩ですら体験されなかった点に注目しているわけである。ところで『寺泊御書』（真蹟五一四頁）には

『勸持品』云「有諸無智人悪口罵詈等云云。」日蓮当此经文。汝等何不入此经文。「及加刀杖者等云云。」日蓮此经文。汝等何不説此经文。

と、「悪口罵詈」については「当」とし、「及加刀杖」については「説」という表現をしている。「悪口罵詈」は精神的苦痛だが、「及加刀杖」は肉体的苦痛をも伴っている。これから察すれば「色説」という言葉には、体による、しかも死に直面するような迫害を意識した意味を含んでいると言える。それ故、具体的に色読の自覚があらわれるのが、東条法難以後と言えるわけである。「日蓮一人説めり」という自覚は、釈尊以来今日に到るまでという意味の時の中で「一人」なのである。『開目鈔』（首真蹟五四九頁）に

伝教大師計り法華経をよめり

という場合の「よめり」とは法華経の真理を読む・理解したという意味であり、日蓮聖人が「読む」というのは身に読む、及加刀杖の読むとの意味である。このように法華経の色読には値難が必要絶対条件なのである。

この様に「勸持品」の二十行の偈の引用を中心に法難を説き示された経文を引用するという事が、単なる論証の為だけのものではないといえる。とくに勸持品では釈尊からの言葉ではなく、菩薩たちの誓言として示されているのである。釈尊から語りかけられるのではなく、こちら側から

積極的に法華經弘通を示すわけである。日蓮聖人が勸持品では偈文だけを引用し、しかも法難に出会った時に引用するところに、法華經への積極的な呼びかけ、参加としての自覚をもった引用とみることが出来る。

以上大変ざっぱくではあるが、法華經引用の傾向を中心に検討し、更には法難にさいしての引意についての考察を試みた。文献的にはまだ不完全であり、思想的背景への検討も不十分であるが、これらは今後の課題としてこのレポートを終わる。